学校物語（国吉小の巻8）

――鶏小屋変じて校舎となる――

余木令一

明治も半ばをすぎた、或る日、国吉町長あてに一通の書面が届けられた。郡役所からのもので国府台地区（現在の夷隅町役場所在地）に建設中の建物は小学校用として適当とはみとめがないので、中止するようにという勧告内容のものだつた。

当事者はこまりはてたが一計を案じ、あれは小学校用として使用するものではなく、鶏小屋（トリゴヤ）に予定されているものであると回答した。たちまち攻守ところを異にして役所側は黙認する以外に方法はないことになつた。

カヤぶきの屋根ではあつたが小屋としては豪奢なもので、何びともこれをトリゴヤと信するものはなかつた。寺小屋式の教場にくらべるならば、はるかにましだが、外見も内容も小学校用の建物としては、雄色の多いものであつたことはもちろんである。

それでも開校式はやらねばならず、郡役所の係官も招待しなければならない。ままよ「あとはどうなと、きやーなろたい一だ、と覚悟をきめた。開校式の日がやつてきた。案内された役所の学事係官が建物をみてびつくりした。鶏小屋になる筈のものがいつしか小学校々舎に化（ば）けていたからである。

むかし、シナの故事物語に青い（滄い）海原が一夜にして緑の桑田（畑）になつたとある。「滄桑（そうそう）の変」という熟語はこれから生まれたらしい。係官も滄桑の変ほどのおどろきではなかつたにせよ「鶏小屋変じて小学校となり、ニワトリ化して生徒となる、か一と、つぶやき、にがみきつた表情をしたものと想像される。しかし、既に生徒は整然と立ちならんでいる。先生も町の有力者も一般父兄もみな所定の位置に待機の姿勢をとつている。いくら役人が肩で風を切つていた時代でもいまさらどうにもなるものではない。とにかく式はとどこおりなくすまされた。係官も一パイくわされたとなげいたことだろうが、あとは何とかつくろつてしまつたらしい。

この事件は役人の処置がわるかつたのでもなく、町の当事者が今日の言葉でいうヤミ建築を故意にやつてのけたものでもない。この場合は双方をあくまで善意に解してやらねばならない。そうでなかつたら両者はまつたく浮かばれないだろう。何故か。村落の合併をはたしたばかりであり、町の財政は窮乏状態にあつて急には立派な校舎を建てる余裕がなかつたからである。役所としてもこの間の事情はよく知つていた筈で、ある程度大目に見るよりほか策はなかつたのであろう。ちなみに当時、役所の学事係長は吉野一松という人であつた。